

公開・国際シンポジウム「聖遺物とイメージの相関性 東西比較の試み」

## 聖遺物と造形イメージの相関性

—東西比較の試み

秋山 聰

1990年代に欧米で西洋美術史を勉強した者がその影響から逃れ得ない書物の一つにハンス・ベルティンクの『イメージと儀礼』がある。<sup>1</sup> トゥーノ、モントゴメリー両氏もベルティンクのこの書物に言及されているが、本シンポジウムの企画を担当した筆者自身もこの書物に大きな刺激を受けた者の一人である。中でもこの書物の第14章は、シンポジウムを企画するに至った大きな要因の一つであった。

第14章では、主として聖遺物とイメージの「同盟 Allianz」ないし「互恵関係」が論じられており、<sup>2</sup> これ以降、聖遺物が西洋中世美術の歴史的展開に果たした役割の重要性に、美術史家たちの関心が次第に向けられるようになった。しかしそれに加えて我々日本人にはさらにもう一つの驚きが、この章の中にある。あるページをめくると、突然このような図版が眼に飛び込んでくる(図1)。西洋中世の専門書を読んでいる最中に、突然見慣れた地蔵菩薩像を眼にしたときの驚きをどのように表現したら良いだろうか。丁度この本を初めて読んでいた頃、筆者はドイツの田舎町に留学中だったが、日ごろ抑圧していた里心が幻という形で出現したのかと思い、一瞬たじろいだほどである。ベルティンクは、聖遺物を人物像型聖遺物容器に納入するというキリスト教特有と思われがちな行為が、決してキリスト教に限られたものではなく、ある種の普遍性を有するものであることの例証として、ケルンの東洋美術館所蔵の深草地蔵院旧蔵の地蔵菩薩像を引き合いに出している。<sup>3</sup> この

図1 Hans Belting, *Bild und Kult* の pp340-341

ページを初めて開いた際の鮮烈な印象は、その後残像のように意識の片隅に残り続けており、ここで比較美術史的視点から聖遺物とイメージの相関性について議論してゆくにあたり、まずこの事例から考察をはじめてみたい。

我々一般の日本人にとって、仏像は何よりもまず仏の像であり、それを容器とはみない傾向があるように思われる。聖遺物容器がまず聖遺物を保管するための容器であって、しかる後に聖人の像であるのに対して、たとえ像内納入品が発見されたとしても我々にとってその仏像は、容器というよりは仏像であると感じられる。この点で、ベルティンクの比較に対しては、その意義を認めつつも、多少の抵抗感を感じる、というのが我々の平均的な感覚ではないだろうか。

実は、キリスト教の聖遺物容器と、この地藏菩薩像には、明らかに大きな相違点がある。聖遺物容器の中には、基本的には聖遺物しか納入されないのに対して、この地藏菩薩像中には、仏舎利のほかにも多数の印仏（仏像が印刷ないし押印された紙片）や陀羅尼（経文が印刷されたもの）、小さな釈迦像や観音像、彩色された地藏菩薩像等が取められている（図2）。仏像の場合、その中に取められるものの種類は多岐に亘っており、西洋で言う

図2 深草院地藏菩薩像とその像内納入品、ケルン東洋美術館 (*Ornamenta Ecclesia*, Bd.3, p.50, 51)

聖遺物の範疇を大きく越えている。中でも経典や版画を納めるという事例は、キリスト教にはない習慣と言えよう。

しかし一方で、我が国には、経典をはじめとして像内納入品と同じような品目を納めて、地中に埋められた経筒や経箱が数多く発見されている。56億7千万年後に弥勒菩薩が下生し、人々を救済するまでの間、損傷なく保存されることを願ってこうした筒や箱に、経典等を収めたようだが、我々はこれらを容器とみなすことには格別の違和感をもたない。しかし同じような品々が内部に納められており、実質「容器」として機能していても、その「容器」が人間の姿をしていた場合、それを「容器」と呼ぶのを、どうやら我々はためらうようである。筆者自身、この春（2007年）京都国立博物館で開催されていた『藤原道長展<sup>5</sup>』で、数多くの経筒を眺めた後で、いきなりこの石仏（図3）と鉢合わせした際に、仏像を容器と捉える感覚もありうることを遅まきながらはじめて実感したばかりで、実のところ、いまなお仏教美術において「容器」と「像」との境界線がどの辺りにあるのか、よくわかってはいない。

ところで、西洋においては、モーゼの十戒中の第二戒によって、立体像に対するタブー意識が表向き長く保たれたこともあり、人物像型聖遺物容器は像である前に容器であるべきものだったと考えられる。しかし、ではなぜ、様々に寄進者の願いが込められた品々が、我が国におけるように聖遺物とと

もに納入されることが一般化しなかったの  
 だろうか。モントゴメリー氏の言われるよ  
 うに、聖遺物は聖人と等しいばかりではな  
 く、聖遺物容器とも融合して知覚されてい  
 たと思われるが、そうだとすれば、容器の  
 内部とは、聖人の内部でもあり、到底人間  
 の手の届く領域ではないことになる。その  
 ためか、キリスト教徒は自らの寄進した品  
 を容器の中ではなく、外面に嵌め込んだり、  
 掛けたりした。

ここには少し奇妙にも思われるある種の  
 逆転現象が看取される。聖人の形姿をして  
 いても、容器であることによって許容され  
 ていた人物像型聖遺物容器は、聖人と融合  
 して知覚されることにより、その内部は人  
 間の手の届かぬ空間となり、聖人の聖遺物  
 のみが納められることを許された。奥健夫

図3 石造弥勒如来座像、志岐鉢型  
 嶺経塚出土、奈良国立博物館（『藤原  
 道長展』図録、p.188）

氏が指摘される「仏像の道具化」以降のことではあるの  
 だろうが、我が国では仏像を容器とみなすことは好ま  
 ないにもかかわらず、ありとあらゆる奉納品を詰め込  
 むことが厭われてはいない。あるいはひょっとして仏  
 像を容器とみなすことに抵抗を感じているのは現代の  
 我々なのであって、かつての仏教徒たちにはそのよ  
 うなこだわりがなかったのだろうか。

いずれにせよ、ベルティンクによる地藏菩薩像の引用は、  
 なかなか複雑かつ興味深い問題を投げかけているよ  
 うに思われる。近年の仏教美術史とキリスト教美術史  
 における研究の飛躍的発展とこれまでの研究の蓄積を  
 考慮すると、そろそろこうした問題に、従来の学問領  
 域を超えて取り組む段階に達しているのではないだ  
 ろうか。様々な協力作業は大いに互恵的なものとな  
 るのではないだろうか。本日の第一部での4名氏によ  
 るご発表の中にも、様々な比較しうる可能性や、一  
 方の研究成果が他方に刺激を与えうる事例

がうかがわれたように思われる。恐らく祖先や偉人を崇拜するといった普遍的な現象をその淵源にもつ広い意味での聖遺物信仰を軸に置いたことにより、それぞれ単純に比較するには膨大に過ぎる仏教とキリスト教双方のイメージ世界の中で、比較対象を絞り込むこととなり、ある程度共通の土台の上での比較が出来るようになったからかもしれない。

さて、四氏のいずれも刺激的なご発表から、幾つか思い至った点について触れておきたい。仏教でもキリスト教でも、当初聖遺物は開示されるよりも隠蔽されることが一般的であったようだが、肥田氏は、やがて中国において舍利が王権と結びつき、一般に公開されることが重要となったと指摘された。これはモントゴメリー氏が紹介されたマーストリヒトの聖セルヴァティウス教会の事例のように西洋において定期的公開行事が常態化するよりはかなり早いようである。しかし西洋においても、トゥーノ氏の指摘するように、教皇や皇帝の権威をさまざまな形で聖遺物が支えていた。今なおローマがキリスト教の一大中心地としての権威を保ち続けているのも、元はといえばペテロとパウロという二大使徒をはじめとする数々の殉教聖人の遺体をローマが保有していることによるものである。また国王が聖遺物を手ずから民衆に公開するという行事は、西欧では1239年のフランス王ルイ9世によるキリストの茨の冠の呈示が有名だが、多くの国では王位継承の正当性を保証するレガリアの中には多かれ少なかれ聖遺物が含まれていた<sup>8</sup>。

一方で聖遺物が公開される際の公開方法や人々の反応については、西洋の事例との共通点が多くうかがわれるように思われる。ほんの一瞬しか眼にとまらないにもかかわらず人々が熱心に聖遺物の公開に押しかけるとするのは、洋の東西を問わず共通する現象のようだが、やがて西洋では公開行事参加のよすがとして、公開された聖遺物を図示した記念品が販売されはじめる。一例を挙げれば、これは神聖ローマ皇帝の皇位継承の正当性を保証する「帝国宝物」の公開行事を示した版画で、公開行事の式次第を挿絵付きでまとめたいわゆる『ニュルンベルク聖遺物書』の一葉(図4)である。町の中央の広場に仮設の櫓を設けて、その最上階から聖職者と市の高官が順次聖遺物を呈示し、説明役が大声で説明した。時に死者が出るほどに多くの群集で埋め尽<sup>9</sup>

くされた広場からは、見ただけで霊験あらたかであるとされていたとはいえ、個々の聖遺物、というよりは聖遺物容器はほんの豆粒くらいにしか見えなかったことだろう。そこでこのような書物は、人々にとって自らの体験を補充してくれる貴重なメディアとなっていた。興味深いことに地上にいる人々の何人かは、丸い鏡とおぼしきものを掲げている。実際にこうした聖遺物公開行事には、人々が鏡を聖遺物の方に掲げて、少しでも聖性を捉えて、持ち帰ろうとしたらしく、アーヘンではパンを掲げて聖性を宿らせようとした事例もあったと伝えられている。<sup>10</sup>このような行為は、我々には些か迷信的とも思われるかもしれないが、1990年代

半ばに中国において舍利が公開された際にはやはり数多くの人々が鏡を持参して、聖性を捉えようとしたというから、時空を越えて普遍的な衝動であるようだ。

最後に、聖遺物とそれに関連するイメージとの関係を、当時の観者がどのような興奮をもって見つめたのかを実感をもって理解するのに、とてもわかりやすい事例を紹介してコメントを終わりたいと思う。これはウィーンの美術アカデミーに遺されているデューラーの遺髪だが、これを1500年の自画像と並べてみると(図5)、デューラーの絵画に匹敵するような異様な実在感をこの毛髪は我々に与えるだろう。<sup>11</sup>この実在感は、遺髪を単独で見ると、このように遺髪の本来的持ち主のイメージと共に見ることによって一層掻き立てられるのではないだろうか。このことはまた本シンポジウムのメイン・テーマが必ずしも宗教文化の枠組みの中にとどまるものではないことを

図4 ニュルンベルクにおける帝国宝物の公開行事の様子(『ニュルンベルク聖遺物書』の一葉)

図5 デューラーの遺髪(ウィーン、造形芸術アカデミー)とデューラー作『1500年の自画像』(ミュンヘン、アルテ・ピナコテグ)

示唆しているようにも思う。このシンポジウムの目的はあくまでも宗教文化における「聖遺物とイメージとの相関性」だが、ひょっとすると世俗化した聖遺物ともいえる「遺品とイメージの相関性」もまた将来のテーマたりうるかもしれない。

■註

- 1 Hans Betling, *Bild und Kult: Eine Geschichte des Bildes vor dem Zeitalter der Kunst*, München 1991.
- 2 *op.cit.*, p.336ff.
- 3 *op.cit.*, p.340f.
- 4 Ancon Legner (Hg.), *Ornamenta Ecclesiae: Kunst und Künstler der Romanik*, Bd.3, Köln 1985, pp.50-51.
- 5 『金峯山埋経一千年記念 特別展覧会 藤原道長：極めた栄華・願った浄土』、京都国立博物館、2007年、pp.188-189.
- 6 奥健夫、「生身仏像論」、「講座 日本美術史4 造形の場」、東京大学出版会、2005年、

pp.293-322; 奥健夫、「仏像と人体」、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 文化交流紀要』、第 20 号、2007 年、pp.95-120.

- 7 今回のシンポジウムでは取り上げるゆとりが無かったが、聖遺物崇敬に関してキリスト教と仏教との間に全く相関性がなかったわけではないことを示唆する事例が存在する。近代になって「マイナー・アーツ」に押し込められてしまった観のある諸々の工芸品は、その素材が高価であったことにもよるが、近代以前は絵画などよりもかに高い価値を有していた。聖遺物のように高い聖性価値を有するとみなされたものを収納するためには当然ながら非常に価値の高い素材からなる容器を使用するのは、普遍的な現象といえよう。価値の高いものとは、専ら身のまわりにはあまりなく、珍しいことにより希少価値を有するものであることが多かった。そして珍しいものの大半は、貴金属を別にすれば、専ら遠隔地から招来されたものであった。その結果、キリスト教の聖遺物容器においても、仏教の舍利容器においても、舶来品が活躍する機会が多い。その典型がガラス容器と言える。容器として用いられている地域からは遥か遠く離れたところから持って来られることが多く、場合によっては、同一地域（たとえば、西アジアやエジプト）で作られてそれが片や仏教文化圏に、片やキリスト教文化圏にとということもありうるだろう。今のところまだガラス研究の成果が聖遺物とイメージの相関性をテーマとした宗教美術研究にまでは十分には到達していないように思われる。

また絹織物などの布についても同様のことが言えよう。例えば、バーゼル大聖堂旧蔵（現在、大英博物館所蔵）のエウスタキウスの頭部型聖遺物容器（図 6）の中には、実はエウスタキウスのもと思われる骨片に加えて、十数種類の骨片が個別に様々な地域からもたらされた絹織物に包まれて納められていた。そのうちのいくつかは中国、少なくとも中央アジア産であろう考えられている（Timothy Husband (ed.), *The Treasury of Basel Cathedral*, New York 2001, p.54）。今日現存している古布のかなりは、聖遺物を包むという宗教上重要な役割を担ったことによって、散逸を免れた面もある。こうした古代・中世の布についての

図 6 聖エウスタキウスの頭部型聖遺物容器、ロンドン、大英博物館 (*Head, op.cit.*, p.18)



研究成果が聖遺物研究にフィードバックされることも期待される。

- 8 ルイ9世とピザンチンから奉遷されたキリストの受難ゆかりの一連の聖遺物については木俣元一、「イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ：サント・シャペルとその装飾」、『西洋美術研究』、第14号、2008、pp.33-53を参照。
- 9 拙稿、「如何にしても気高き帝国の聖遺物が呈示されたのか：ニュルンベルクにおける帝国宝物の展観」、『西洋美術研究』、第10号、2004、pp.9-35.
- 10 Kurt Köster, *Gutenberg in Strassburg*, Mainz 1973, p.32; 拙稿、「複製品にどのように聖性が宿りうるのか：グーテンベルクと鏡付き巡礼記念バッジをめぐって」、『西洋美術研究』、第11号、2005年、pp.94-107.
- 11 拙稿、「芸術家の「力」——芸術家崇拜と聖遺物崇敬」、『アートセラピーの現状調査と研究：アートセラピスト養成プログラムの開発』（平成16年度「広域科学教科教育学研究経費」に係わる研究報告書）、東京学芸大学、2004年、pp.30-42. なおデューラーの遺髪 の 来歴 については Michael Roth, “Ein Dürers Locke”, *Zeitschrift für Kunstgeschichte*, 66 (2003), pp.261-272 に詳しい。

(あきやま・あきら 東京大学大学院人文社会系研究科准教授/グローバルCOEプログラム事業担当推進者)